

短期海外研修の意義とその事前研修について — 学生の報告書とアンケート調査の結果から —

Significance of Short Overseas Study Program and its Preparation: The Result of the Questionnaires and the Reports

松田 康子
Yasuko MATSUDA

本稿では学校が行う海外研修の成果からその意義を示し、よりよい海外研修を実施するためにはその事前の研修が重要であることを再確認するものである。

過去4年間のアンケートと海外研修報告書の調査資料から本学の海外研修の評価がおおむね良好であったことがわかった。参加学生たちは海外研修で異文化体験から英語を学習する意欲や人間的な成長を自覚している。そのための事前研修は目的意識を高めるために重要である。最近、海外生活を安易に考える学生の参加が前回の調査よりも増加し、事前研修において目的意識の高め方が重要であることがわかった。

キーワード：短期海外研修、事前研修、ホームステイ、アンケート

overseas study short program, preparation of study tour, homestay, questionnaire

1. はじめに

本学の海外研修は平成6年度から始まって平成17年度で11回になり、毎年学生たちが書いた海外研修報告書の冊子も11冊になった。年が経つとともにプログラムの内容は改良され、学生の参加する意識も変化したように感じられる。最近4回の学生による研修報告書やアンケート調査から研修の成果をまとめ、現在の海外研修の意義を再検討するとともに、本学の海外研修の特徴である事前研修をどのように進めたら良いのかを考えたい。加えて、第1回から第3回の海外研修の結果(平成10年度の報告)と第8回から第11回の最近の海外研修の結果と比較し、今後の課題を検討したい。

2. 本学の現在の海外研修

本学の海外研修は第1回目から第7回目まではシドニーで実施し、第8回目から第11回目はブリスベンのクイーンズランド大学で実施している。本学の海外

研修は平成6年度「広く世界の歴史と文化を学び、正しい歴史観を確立する」という建学の精神に沿って、異文化体験と語学学習をするという目的で、大学での英語研修とホームステイを組み合わせたかたちで始まった。そして、学生が興味を持てる研修にするために、学科の特色を生かした見学や体験企画を研修の日程に多く組み込んだ。本学の設置学科には食物関係が多いので、具体的にはオーストラリアの栄養士の講演、調理実習、食物関係の教育をしている専門学校訪問などを研修プログラムに加えた。回を重ねるごとにプログラムを改良し、現在の日程になった(表1)。研修に参加する学生は英語学習の専門課程に属していないので語学研修だけではなく、学生たちが自分たちの専攻に関して興味があるものを日本とは違った文化の中で実体験し、それ自体がこの海外研修に参加する目的として成立するようにプログラムを企画してきた。

これまでの本学の海外研修に参加した学生の総数は341名になり、海外研修を11回重ねたことで本学

表1. 海外研修日程

第1日目	中部国際空港出発
第2日目	ブリスベン着 簡単な市内観光 大学でオリエンテーション後、ホームステイ先へ
第3日目	午前 大学でクラス分けテストと英語研修 午後 料理学校で実習
第4日目	アボリジニー文化の見学と体験
第5日目	午前 英語研修 午後 食物関係の専門学校の教育を見学
第6日目	午前 英語研修 午後 スポーツアクティビティ
第7日目	午前 英語研修 午後 キャンパスで現地学生に英語でインタビュー
第8日目	ホームステイ先で自由行動
第9日目	ホームステイ先で自由行動
第10日目	午前 英語研修 午後 オーストラリア栄養士の講演
第11日目	午前 英語研修 午後 修了式
第12日目	ゴールドコースト見学
第13日目	ブリスベン出発 中部国際空港着

入学以前から興味を持って本学に入学した学生が出るようになってきた。

3. 海外研修の成果

アンケートと報告書の内容についてまとめる。

(1) ホームステイ・異文化体験

ホームステイをすることは学生たちが文化や考え方の違いを学び、異文化を体験する良い機会であったようだ。ホームステイで楽しかったのは夕食後の団らんで、料理を手伝ったり、日本食を作ったり、子どものいる家庭では一緒に遊んだことを大いに楽しんだようである。ホームステイを通して学んだこととして一番多かったのは、「コミュニケーションの大切さ」「自ら積極的に取り組むこと」で、英語がうまく使えないために言いたいことが伝わらないのを辛いと感じ、悔しい思いをした学生が多かったようである。ホストファミリーに悪かったと書いている学生もいる。楽しさもあったが同時に悔しさもあったようである。「がんばって伝えようとするればわかってくれる。恥ずかしがってはいけない」と、ファミリーが学生の英語に耳を傾けて辛抱強く聞いてくれた優しさを多くの学生が感じ、間違いを恐れないで自分を表現する必要性を感じてきたようである。そのがんばりに対してぎゅっと抱きしめてもらって感激し、「家族ってあたたかいものだ」

とか「親切にされて自分ももっと優しく思いやりのある人間になりたい」など、違う家庭の中で生活することで今までの自分を見つめ直すこともできた学生がいたようである。「夫婦の仲の良さにあこがれた」「家族を大切にしていた」「自分は親に頼りすぎていたと気づいた」「あんな家族になりたい」「愛国心を感じた」「共働きでお父さんが料理を作っていた」など、異文化の中で生活した感想も多かった。

食生活についての感想も多く、「ベジタリアンが多い」「せっかく野菜を多く食べていてもアイスクリームでカロリーが高くなる」と食物栄養を勉強している学生らしい見方をしていたり、「子どもの弁当は日本で日本の弁当の方が野菜など食品がそろっているのが健康的」とオーストラリアに来て日本の良さを再発見したと感想を書く学生がいた。

この海外研修の全体からの感想でもホームステイでの家族と過ごしたことが一番印象に残ったこととしてあげられている。日本食を作って好評だったことや、南十字星を教えてもらったなど、オーストラリアへ行ってコアアラを抱いたりカンガルーを触ったりなど、新しい経験があったにしてもホームステイでのファミリーと過ごした時間は一番貴重な体験であったことがわかる。

(2) 英語研修・英語力

大学での英語研修の内容は午後のアクティビティと関連し、午後に料理学校へ行く時は午前には調理用語を学び、午後にスポーツの時はオーストラリアのスポーツのトピックについて学ぶように組まれている。クラスは初日にプレイメントテストを行い、T E S O L (Teachers of English to Speakers of Other Languages) の判断基準を基にした現地の大学の方針で分けられる。ほとんどの学生は授業内容に関して「適当である」と答えているが、年によってはクラス分けの結果で教材が「難しい」と答える学生がいた。授業時間数についてはほとんどの学生が「適当」と答えているが、授業時間が「多い」と答えている学生が少数いた。アクティビティをプログラムに入れたために、毎日予定がしっかりと組まれていて自由行動の時間をもっとほしいという希望があらわれた結果と思われる。

この英語研修の中では自分たちが日本の食べ物や食生活について質問を作り、実際に大学のキャンパスの中で現地の大学生に対して英語でインタビューをするアクティビティがあり、その後その集計結果をグ

ラフなどにまとめて英語で発表する授業が取り入れてあった。はじめはできるかどうか心配な学生がいたが、外国で積極的に英語を使う良いチャンスと考えてチャレンジできたことで学生たちの自信につながったようである。このインタビューが英語の間違いを恐れず積極性が大切であると実感できた時間であった。現地の大學生たちも質問に対して気楽に答えてくれ、本学の学生の手元にはその時の写真が思い出として多く残っている。インタビュー後の結果をまとめて英語で行う発表は苦労したようであるが、苦労したもののほど学生たちの大きな経験になっていたようである。

この研修全体に対して学生が自覚している英語力への影響についてのアンケートでは9割以上が「大いに」または「少しは」影響を与えたと答えており(図1)、これを海外研修第1回～第3回の前回の報告と比べると、ほぼ同じ結果になっており、海外研修の英語力への影響は大きいことが変わらずあらわれている。英語に対する気持ちの変化についても「英語への関心が増した」「聞く力が増した」が多く、続いて「間違いを恐れなくなった」「英語に対する抵抗がなくなった」の順であった。

ホームステイではコミュニケーションの大切さを学び、もっと英語で話をしたかったと多くの学生が答えているので、英語を十分スムーズに使えたとは思えないが、帰国後の学生たちが英語を学ぶ意欲が大きくなっていることは明かである。

(3) 人間的成長

英語が得意ではないとはじめから言っている学生たちにとってオーストラリアでの研修で得られたものは英語についてだけではない。学生たちが感じる研修の効果は人間的に「大いに」または「少しは成長した」と答えた学生が9割を超えることから精神的な成長に大いに影響力があったと考えられる。(図2)年によって少しの差はあるにしても、積極性・自立性・気配り・思いやり・忍耐力、努力・探求心が成長したと自覚している。これも前回の報告とほぼ同じ結果になっている。例えば、後輩へのアドバイスでは「毎日が刺激的でつまらないことがなかった。この刺激を得てものの見方を変えたり価値観をかえたり、自分の未熟さに気づかされ精神的にもちょっと大人に成長できたと思う」と書いている学生がいる。

帰国後、自分が成長したと感じたことの結果はすぐにはわかるものではないが、報告書などの文章から読み

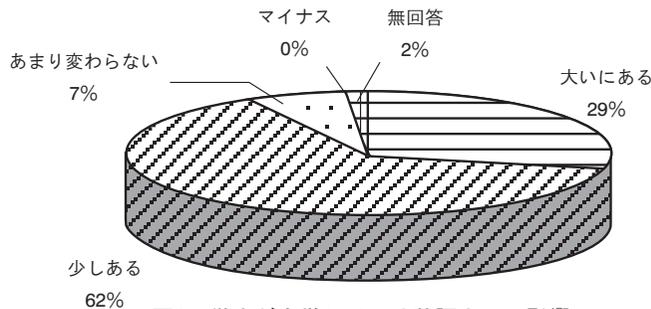


図1. 学生が自覚している英語力への影響

海外研修に参加して人間的に

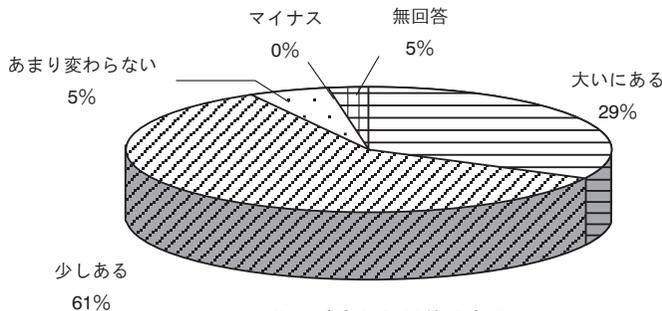


図2. 学生が感じる研修の効果

とれる海外研修で得られた感動は疑いない。短い学生生活の中でこのような感動を持ったことが大きな海外研修の成果と言えよう。この海外研修に参加した学生が何人も学生自治会などで活躍をしている場面を目にすると、何かしらの成果を感じる。

海外研修を終えて、「行く前と後で気持ちの変化はありますか」という質問に対しては「言葉は大切だけど話そうとする気持ちが一番大切」「感謝の気持ちを強く思うようになった」「何でも積極的にしようと思う」「自立した生活をしたい」「達成感が持てて精神的に強くなれた」「日本が好きになった」「英語をしゃべるようになりたい」「また海外へ行きたい」などで、英語や外国に対しての気持ちと同じように自分自身の気持ちの変化を感じている学生が多かった。

(4) その他

学生たちの生活で大変だったということにバス通学があった。研修先の大学の年度初めということもあり、満員のバスに乗れずに遅刻したり、バスを乗り間違えたり、降りたいバス停で降りられなくて終点まで行ってしまった、違う大学へ行ってしまったなど、バスについての失敗談が多い。「バス車内の案内放送がない」「景色が同じで降りる場所がわからない」「バスは日本ほどぎゅう詰めに乗せない」「時間がルーズ」など感想も多い。しかし、2日目に遅刻した学生が何人かいたことはあったが、一度失敗すると二度と失敗を繰り返さないで学生たちがバス通学に慣れていくようすを見ることができた。

また、オーストラリアのアボリジニの歴史や生活を知り、感銘を受けた学生が多い。アボリジニの独特な文化を知り、オーストラリア料理というと香辛料にアボリジニの使うものがあることも知った。「大学が広くて緑が多い」「オーストラリアの人はとてもオープン」「オーストラリアでの日本食のイメージの違い」「食生活の違い」「のんびりした生活の送り方」「水の大切さ」「スーパーや店が早い時間に閉まる」「バス停で話しかけられた」「いろいろな民族の人がいる」「食事のマナー」など、多くの感想がある。これこそ海外研修で外国へ行ったために実際に体験してこそその感想である。

このプログラムに取り入れた専門学校見学では現地の学生たちが実際に実習をしているレストラン、肉屋、パン屋、バーなどの店があることを知って「実践的な授業をしている」、スーパーマーケット見学では「オーストラリアの食材をたくさん知った」、オーストラリ

アの栄養士の講演では多くの質問が出て時間がなくなってしまうことなど、食物栄養を専攻している学生たちに興味がある見学や体験が意義あるものであったことが感想として出ていることで、プログラムの改良の成果が感じられる。

4. 事前研修

週1回の「海外生活事情」の講義としては次のような内容を組み合わせて実施している。

- ・ 海外研修の参加心構え
- ・ 異文化体験の心構えとホームステイの意義
- ・ ホームステイ先での話題作り
- ・ 海外での生活一般の注意
- ・ 海外旅行についての知識、渡航手続き
- ・ 英語会話
- ・ オーストラリアについてインターネットなどを使って知識を得る

など、バラエティーに富んだ内容になっている。その中でも力を入れているのは、「ホームステイ先での話題作り」である。学生すべてが英語を専門に勉強をしている学科の学生ではないので、当初から英語が得意だという学生はほとんどいない。英語が使えないと自分の言いたいことが伝わらず楽しめないことをまず理解させ、それなら自己紹介から趣味、自分のわかる範囲で日本について英語で話ができるように準備をしていこうというものである。これは年度によっても学生の取り組みの具合が違うが、準備は必要だと思ってもなかなか完璧にできて参加したとは言えない。中には写真をアルバムのようにして説明を書き込んだものを持って行った学生もいた。自分では準備をしてみたと思ってもホームステイ先で話し出すとすぐに話題は尽きてしまい、自分の思い通りには話ができなかったという学生が多い。しかし、話の話題を準備してきたという学生の姿勢がホームステイ先の人たちに通じて、ホームステイファミリーの方からいろいろな話題を与えられた学生がいる。「話題作り」で準備していった話から「自分の英語が通じた」と喜び、話を始めるきっかけになっていったようである。

海外研修のための「海外生活事情」での事前研修は役に立ったかの質問にはほとんどの学生が役立ったと答えてくれた(図3)。役立ったと答えた内容は「海外生活の注意を聞き生活に対する不安が減った」「心配や緊張がほぐれた」「ホームステイ先での話題作り」「前もって文化を少し理解していくことですんなり生

活に入っていた」「英語は大切だということ」「受け答えができる英語の勉強」「オーストラリア英語の特徴」「先輩からのアドバイス」「歌の練習（ファミリーと一緒に歌えた）」「ホームステイをイメージするのに参考になった」「用意をどうすればいいかわかった」「友だちができた」などがある。研修に参加する学生はこの事前研修の時間で仲良くなり、現地に行っても助け合い、学科を超えて友だちができたのはよかったと答えてくれた。「先生の大げさな話でびくついたが、そのくらいでよかった」と答えた学生もいて、生活全般の体験談や心構えが役立ったと答えている。

ホームステイでの生活についてはバスルームの使い方から学生たちが現地で直面する話題を用意して英語と心構えを話していくので、本学の学生がホームステイ先から苦情を言われることは今までにはなかったが、受け入れ先のホームステイファミリーがどのように感じているかは不明な部分が多い。年々学生たちは違うが、生活全般についての事前研修は重要である。本学の学生がホームステイをしたファミリーが次のように言ったところを後で聞いた。「以前受け入れた他校の日本学生はある日電話をしてきて、バス停に着いたが今日は疲れて歩きたくないのでバス停まで迎えにきてほしい」と言ったそうである。日本でのわがままな生活がそのまま通ると思って何の心構えもなくきた学生がいたらしく、本学の学生と比較されたようである。日本の学生を何度も受け入れてくれていたそのファミリーは日本の学生について「とても礼儀正しくて気持ちのいい学生だ」と思っていたのに、身勝手な学生がいたことで憤慨していたという。本学の事前研修でも学生たちは生活全般の話聞いてはいるが、日常生活で指摘されなければ気がつかない部分が多いよ

うである。事前研修でどこまで詳しく生活全般についての話をするのかは考えなければならないが、口に出して伝えなければ気がつかない学生が多くなってきているようである。

出発際に「海外研修について期待や楽しみにしていることと、心配なこと」の事前アンケートを実施しているが、前回の報告では英語について「大変心配」が圧倒的に多かったが、最近4回のうちでは英語については「少し心配」に変わってきている。ホームステイ先について、例年「少し心配している」が多かったが、平成17年度ではホームステイ先については「あまり心配していない」が一番多くなった。「全く心配していない」学生もいた。事前研修で海外での生活や心構えについてよく話をしているが、毎年参加学生は変わってきて参加意識も気楽になっているように思えることがある。一般に旅行会社の海外旅行は簡単に参加できるし、ホームステイには誰でも参加でき、情報も多くなっている。本学でも帰国後に先輩たちが楽しかったことばかりを思い出して話している場合が多いので、そう言う話を聞いたり情報を得たりした学生は行く前にそれほど心配することがなくなってきた。それを事前研修で掘り起こしてこんなに大変だと先入観を入れるつもりはないが、ホームステイも英語も何とかなると気楽に考えている学生が以前よりも多くなったのは確かである。それでいて英語力や人間的成長の意識が前回の報告の時とほとんど変わらなく多いのは、研修に参加して実際に英語やホームステイが改めて大変なことがわかり、自分の成長を自覚できた結果であろう。思ったより英語もホームステイも大変だったようである。第11回目の海外研修では、現地大学の時間がある時に同行教員をつかまえて英語を聞

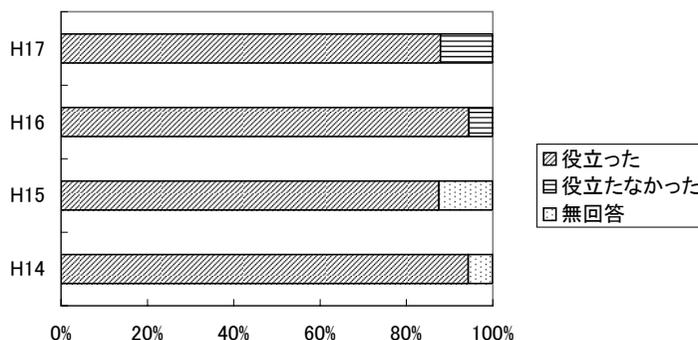


図3. 学生による事前研修の評価

く学生が例年よりも多かったように感じる。ホームステイが楽しくなってきたとしても自分が言いたいことをすぐに言えないもどかしさが、大学にいる時に英語を準備してホームステイ先に帰ってこれだけは伝えたいと言う思いがさせた結果であろう。これらのように日本出発の前に気がついて準備をしてきていたらいのにと思うことが多い。事前研修はそのためのものであるはずが学生をその気にさせることの難しさを感じる。研修から帰った学生の多くが「英語をもっと勉強してもう一度行きたい」と報告書に書くのも研修に参加したおかげであると考え、もっと早く気づかせて意識を高める方法を検討したい。

帰国後は研修についてのアンケートと報告書を提出させ、研修事後に体験をまとめている。この報告書の作成について自分の思いをうまく文章で表現できず、以前よりは時間をかけて対応する必要が出てきている。学生たちが話し出すとたくさんのエピソードが出てくるので、海外研修で得られた感動は大きいのは確かである。自分の思いをすぐに言葉で表現することの難しさもこの研修中の学習の要素だと考え、学生の成長を手助けしていきたい。

5. 今後の課題

過去11回の海外研修に参加した学生のこの研修の評価は全体的に良かった。学生たちはホームステイも英語研修やプログラムの内容についてもこれをやめた方がいいというものはない。それぞれが意義あるものとしてとらえてくれた。これはプログラムを改良してきた結果と考えられるが、受け入れ先の大学との連携が重要な要素であったので、これからも改善点を模索しながらプログラムを検討していきたい。

事前研修は海外研修に参加する学生により明確な異文化体験の目的を持たせて、自らが行動できるように意識を高めるものである。学生の意識しだいで海外での生活体験を無駄にすることのないようにしっかりと心構えを持たせることが重要である。気楽に参加できると安心させるものでなく、自分が参加したいという意識を高める事前研修を実施したい。

また、異文化体験のストレスは予想つかない場合がある。海外研修出発直前の不安な気持ちは大きなストレスにもなる。研修で学科を超えた友だちができたことを研修の良かった点と答える学生がいたので、出発前から学生が同じ意識を持ちあえるような雰囲気作りも事前研修の中で心がけていきたい。

英語力不足はアンケートの結果からも大きな問題である。語学を専門専攻していない学生たちが海外研修に参加しているので、事前研修の中での英語学習は大きな比重を占めているが、それでも十分とはいえない。海外研修をより有意義なものにするためにはホームステイや現地の人々との交流が不可欠であるので、学生たちが感じたコミュニケーションの重要性を研修前により自覚させ自学自習の必要性を認識させたい。研修後、報告書などを書かせて提出させているので海外研修で高まった英語学習意欲や積極性などの人間的成長の意識を確認はできるが、それを継続させるその後のケアも検討の余地があると考え。

参考文献

- 1) 松田康子, 滝川桂子, 短期大学における短期海外研修の意義とこれからの課題, 名古屋文理短期大学紀要第23号(1998).
- 2) 海外研修報告書2003年3月, 名古屋文理短期大学(2003).
- 3) 海外研修報告書2004年3月, 名古屋文理短期大学(2004).
- 4) 海外研修報告書2005年3月, 名古屋文理大学短期大学部(2005).
- 5) 海外研修報告書2006年3月, 名古屋文理大学短期大学部(2006).